

校内研究計画

1. 研究主題

共に学び，豊かに表現する子どもを育む授業づくり
～確かな読みが伝え合う楽しさにつながる国語科の指導を通して～

(1) 主題設定の理由

本校では平成25年度から平成27年度にかけて「かかわり合い」を軸にした交流活動を，算数科においてどのように組み込んでいくべきか実践を重ね研究をしてきた。研究の主な成果は以下の通り。

- ・交流やつなぐことを意識した授業を通して，友達の考えで自分の思考を深めるという習慣がついたのではないと思う。
- ・意図的に交流の場面を取り入れることで，子ども達が必然的に思考する場面ができた。
- ・交流することによって，一人一人が課題について自ら考えるようになった。友達の多様な考えを聞くことによって，思考力が深まったと感じる。また，友達と交流したり，全体の場で発表したりする機会を設けたことにより，表現力の高まりにもつながっている。

平成27年度研究紀要「研究のまとめ」より

共通の課題に対して自分なりの意見をもち，ペアやグループといった交流形態で意見を交流しながら考えを深めたり伝え合ったりする力が向上してきた。

一方で，話し合いをする前の段階で，必要な情報を正しく把握する力が不足がちであったという課題も浮き彫りになった。話し合いが始まるまでに意見がまとまらない，または，もてなくても，情報の受け手として参加するといった交流はできるものの，自分と友達の意見を比較する力やいくつかの意見からより良い考えを選別する力など話し合いを通して身につける力が習得しにくくなってしまった。算数科においては文章問題において，文章の内容を理解することが苦手である児童が多いという報告もあった。

つまり，交流活動の形式には慣れてきたが，「伝える交流活動」から，考えをより深めるための「伝え合う交流活動」へと質を向上させる必要があると言える。そのために必要な力が「表現力（豊かに表現する）」である。課題に向かう全ての子どもが互いの力を高め合うために表現力を伸ばす授業づくりを目指していきたいと考える。

表現力を向上させるための方策として取り上げたのが，課題として明らかとなっている「読解力」である。

読み取ることは，単に情報の取り出しをするだけではなく，内容や表現方法の理解，または筆

者の意図を解釈することが求められている。つまり、考える力と連動することである。このインプット（読解力）がベースとなり、根拠や気持ちを伴った考えを形成することが、質の良いアウトプット（表現力）につながると仮定して研究を進めていく。

(2) 目指す子ども像とのつながり

① 学校教育目標（目指す子ども像）

自ら考え、心をこめて精いっぱいやりぬく子どもを育てる

② みんなの合い言葉

自分が好き、友だちが好き、学校が大好きな開西小の子

③ 目指す学校像

児童の心をひきつける、楽しい学校

創意あふれる、アイデアいっぱいの学校

郷土に学び、ふるさとの心を培う学校

④ 今年度の教育実践目標

よく学び よく体をきたえ なかのよい開西の子

キーワード

「共に」 「豊かな表現」 「確かな読み」 「伝え合う楽しさ」

(3) 豊かな表現「表現力」と、確かな読み「読解力」

今年度から始まる研究は、本校の児童の課題として多くの先生方があげていた「読解力」について国語科を通じて進めることとなった。その背景としては、

- ・算数の文章問題を読み取ることができない。(他の教科においても文章が読めない)
→「何について考えようとしているのか」「何を答えるのか」などがわからない。
- ・国語の「読む」学習で、内容を読み取ることができない。
- ・国語の「読む」学習の時数が少なくなっている。

平成 27 年度研究紀要「研究のまとめ」より

ということが具体的な場面として課題点として報告されている。これは、交流活動を進めていく中で必要な情報を理解できずにいることで、自分の考えが持てずに交流にうまく参加できない子どもの実態があると考えても良い。どんなことを考えるのか、何をまとめるのかなど理解する力を高めることで、より質の高い交流をすることができると考えられる。

そのためにも、文面に書かれている文章を読み取る力を伸ばしていくことが大切であると仮定する。読み取ったことを理解し、自分ならどうするかと考え、それを表現に結びつけていくのである。

2. 校内研究で目指す子ども像

設定した研究主題のもとに研究を進めるにあたり、具体的な目標として「目指す子ども像」を掲げる。全ての子どもが学びに参加し、考えや想いを伝え合えるようになるために国語科の読みを扱う授業を充実させていくのであるが、その際に明らかにしておく手立てを3つの観点に焦点化させていく。

課題意識を持ち、意欲的に解決に取り組む子ども

単元や授業の導入において目的意識や相手意識（課題意識）を持つために必要な工夫を探る。教材に必要感を付加させることで課題意識が高まっていくと考えられる。意欲的に課題に取り組むことができれば、文章中に存在する解決のための糸口に気づいていくであろう。

読み取ったことをもとに自分の考えを持てる子ども

表現するためには、文章中にある筆者や作者が表現している事実や意見、表現方法など様々な情報にふれ、課題を解決するために必要な自分なりの考えを持つことが大切である。どのように読み取り、それをどう考えに結びつけるのかを検証する。

互いに関わり合いながら意見や話題を深める子ども

これまでの研究で高めてきた交流する活動をもとにして「互いの意見を比較してより良い意見を構築する力」や「改めて自分の考えを振り返る力」など、交流を通じて更に身につくと考えられる力を高めていく。

3. 研究仮説

目指す子ども像の具現化をするために、研究仮説を設定した。研究仮説は全体を通した仮説と、目指す子ども像それぞれに対応した仮説1から仮説3がある。

国語科における「読解力」が身につく学習を効果的に指導し、優れた表現や感情について正しい理解を深めていくことで、自分や相手の考えや気持ちをより深く考えたり、その変化に気づくことができるようになるであろう。

さらに、この力がこれまでの研究で実践してきた「かかわり合い」の中で、より豊かな表現力となって生かされていくと考えられる。

課題意識を持ち、意欲的に解決に取り組む子ども

単元や単位時間の導入において、子どもが見通しをもてる課題を設定することで、意欲を持ち続けることができるであろう。

読み取ったことをもとに自分の考えを持てる子ども

読み取る力を身につける具体的な手だてを明らかにすることで、読解力の向上を目指すことができるであろう。

互いに関わり合いながら意見や話題を深める子ども

読み取ったことをもとに、自分の考えをふくらまし、言葉や文などとして表現することで、課題を解決するための話し合いをすることができるであろう。

4. 研究内容

仮説を検証する具体的方策は、主に国語科の指導を通して行わう授業実践と日常的な取り組みとして行う日常実践と分別して取り組んでいく。国語科の指導に関わっては、読解力向上のため「読む」単元を取り上げるのであるが、「読み」で扱う「説明的文章」と「文学的文章」とでは身につけていきたい力が大きく異なる。そこで、研究内容を3年間で一区切りとし、1年次に「説明的文章」について、2年次に「文学的文章」、そして2年間の研究成果を公開する年として3年次を設ける。平成28年度は「説明的文章」を扱う授業に絞って実践を重ねていくこととする。

	国語科の指導として	日常の取り組みとして
主な活動例	<ul style="list-style-type: none">・教材提示の工夫・課題の提示・単元を貫く課題・音読・国語科の授業のきまり・指導計画の見直し・読み取る力の系統化・ノート指導・ペア、グループ交流・スピーチ・討論会・意見文	<ul style="list-style-type: none">・朝読書・音読・日記、作文・短文読み・要約ゲーム・意味調べ・取り扱い説明書・パンフレット・新聞・スピーチ・ペア、グループ交流

平成28年度	平成29年度	平成30年度
1年次	2年次	3年次
説明的文章の読解力を身につける手だてを明らかにする	文学的文章の読解力を身につける手だてを明らかにする	1・2年次の研究成果を公開する第24回公開研究大会開催